

# 日本の道路標識のパターンから見る言語景観研究

梁敏鎬\*

## 〈 要 旨 〉

本稿では実際に本人が集めた言語景観の写真資料をもとに道路標識の表記の傾向や多言語表記のパターンについて考察した。

その結果、初期段階に単一言語表記(J)から徐々に多言語表記(J・E・P)に変わっていくことが分かった。また、道路標識の言語表記が統一(漢字)に向かっていることが分かった。なお、言語表記(英語)が正しく自然な表現が施されつつあることが分かった。そのうち、一番多く見られるパターンは「日本語・英語」の対応である。また、多くの観光客が訪れる施設や道路には韓国語などが付けられているケース(写真5)もある。これは国際化に伴う自然な現象であるが、日本人にとっては装飾的な効果に過ぎないと言えるだろう。一般的に言語景観に登場する多言語表記は田中(2009)が指摘している多言語の標準モデル(日・英・中・韓・ピクトグラム)に当てはまるが、本稿で紹介した道路標識に限定して説明すると多言語の標準モデルの適用は難しい。したがって、多言語表記の政策は場面や相手によって修正する必要があると思う。今後、韓国の調査結果と比較し、日本と韓国の多言語表記の異動について分析を進めていきたい。

論文分野：社会言語学

キーワード：言語景観、多言語、ピクトグラム、事例研究

## 1. はじめに

Laundry & Bourhis(1997)によると言語景観とは「一般に公共の場において見られる可視的な言語表示、つまり文字言語によって形成される景観を指す」と定義している。また、バックハウス(2007)は「道路標識、広告看板、地名表示、店名表示、官庁の標識などに含まれる可視的な言語の総体」と定義している。これらを受けて庄司(2007)では多言語景観について日本語以外を含む表示が形成する可視的言語総体と規定している。

そこで本研究<sup>1)</sup>は日本で見られる言語景観(Linguistic Landscape)に注目し、実際に集めた道路標識の資料をもとに、表記の傾向や多言語表記のパターンについて考察する。これによって言語の多様性を理解し、情報弱者に対する分かりやすい情報伝達を考える基礎研究としたい。

\* 全州大学 研究教授, 日本語学(社会言語学)

1) 本論文は2011年度の政府(教育科学技術部)の財源で、韓国研究財団の支援を受けて研究されたものである。(NRF-354-2011-1-A00169)

## 2. 先行研究

言語景観に関する研究はいくつか見られる。代表的なものとして、バックハウス(2007)、田中(2009)、梁(2010)がある。

バックハウス(2007)は日本の「多」言語景観の一部を具体的に把握するために、山手線沿いの一定地域内の景観を調べた。その結果、東京の言語景観は都の外国人人口の居住パターンを反映していると述べている。また、田中(2009)では標準化の観点から首都圏の多言語表示について把握した。その結果、日本では多言語表示が一般化すると同時に標準モデルに収斂されつつあると述べている。日本での標準モデルとは日本語、英語、中国語、韓国語の4言語にピクトグラム(Pictogram)対応がなされたものを意味する。

一方、梁(2010)では公共施設のトイレとゴミ箱の表記に注目して日本と韓国の言語景観についてパターン化した。その結果、日韓ともに「目に見えることば(掲示)」には多言語表記が施されていたことと多く見られるパターンとしては「自国語 - 英語」にピクトグラム対応である。最近、新しくできた施設には中国語などが付けられていることが分かった。

そこで、本稿では日本であまり触れることができなかった言語景観、特に道路標識を中心に説明する。その上、本人が集めた実際の生データをもとに日本の多言語表記のパターンと言語内容について記述することで、日本の多言語生活の一面をのぞき見たい。

## 3. 調査概要

言語景観の調査資料は日本の各地で集めた写真、録音データ、メモ書きがある。調査資料の収集方法は街を歩いたり、電車や車に乗ったりして、日常生活の場面での道路標識、広告看板、店名表示、官庁の標識など可視的な掲示や案内放送をデジタルカメラやビデオカメラ、ICレコーダーなどにおさめた。このように集めた資料をテーマや分野ごとに分けて分類した。しかし、本稿では誰もが一度は見かけたことがある道路標識の写真資料に絞る。このように限定した資料から多言語表記の有無、構成言語パターン、言語内容などについて分析する。写真資料が非常に膨大であるため、特殊なパターンや興味のある部分を記述することにする。

### 3.1 調査地点

調査資料は2010年7月から2012年6月にかけて集めた。調査地点は日本の場合、北海道、青森県、宮城県、新潟県、東京都、千葉県、神奈川県、静岡県、京都府、福岡県などが中心となる。本人が直接に訪問した地域であるため、調査地点が多様化している。

## 4. 調査結果

集めた資料の数は約3,000枚に達する。分量の制約を考慮し、その中から多言語表記の仕方や構成言語において特徴的なものを選択し、記述していきたい。

### 4.1 高速道路での言語景観

本節では高速道路を走りながら見かけた標識を中心に説明する。



〈写真1〉「走行車線」「合流車線」の例

高速道路を走行する際によく見かける表示の中で「走行車線」と「合流車線」がある。これは日本語で「走行車線」と書かれたものと英語で「TRAFFIC LANE」が併記されたものがある。当然であるが単一言語(日本語、以下Jとする)の表記より多言語の表記(J・E)が新しく、徐々に多言語化に向かっているという予想がつく。

次は隣接車線の合流をあらわす表記である。道路が狭くなることを事前に運転者に知らせるために、写真1の下段のような標識が登場する。この標識は多言語(J・E)で書かれているが、ここに併記している英語に注目したい。「合流車線あと1km」と「合流車線終り」の英語表記が異なっている。「合流車線あと1km」の場合、「MERGING LANE(合流する線)」とシンプルに書かれている。一方、「合流車線終り」は既存の「MERGING LANE(合流する線)」に「通行または走行」をあらわす「TRAFFIC」という単語が入っている。その上、「終り」の意味である「END」が加わり、詳細に書かれていることが分かった。これは初期段階に設置された道路標識に比べて多言語表記が具体化された代表例である。次は標識が持つ意味は同じであるが、表記が異なる例を挙げる。



〈写真2〉「速度落せ」「料金所」の例

「速度落せ」の場合、「速度」と「落せ」の部分に分けて説明することができる。まず、「速度」が「スピード」になった表示がある。これは「スピード」が特殊なケースで、多くの表記が「速度」を採用している。一方、「落せ」の表記はひらがなだけで表現した「おとせ」が特殊である。しかし、この表記も「落せ」に統一されつつあると言えるだろう。結局、これらの標識も多言語化(J・E)が進んでいる。例えば、日本語のみ(速度おとせ)で表記されたものと英語(SLOW DOWN)が併記されたものがある。また、この写真2から言えるのは多言語表記の具体化である。「料金所500m」の表記が初期段階のパターンで「TOLL GATE」しか書かれていない。しかし、後期段階では「TOLL GATE AHEAD」のように「料金所がこの先にある」と具体的に書かれていて、多言語化に伴い、表現の具体化も起きていると言える。次は表記の多様性に関する写真である。



〈写真3〉「分岐」の例

道路が分かれる地点を示す「分岐」という表現が主に英語で書かれている。なお、この英語は略語「JCT」と「JCT.」で書かれており、中には日本語が併記されているものもある。ここで興味深い点は日本語で書かれている部分である。漢語で「分岐」と書かれたものとカタカナで「ジャンクション」と書かれたものが両方存在する。しかし、道路標識の場合、何より可読性が重要である。したがって、文字数が多く瞬間可読率が落ちるカタカナ表記の場合、今後衰退していくだろう。さらに「分岐」という漢語表記も英語の略語に変わっていくと思われるが、今後「JCT」と「JCT.」のうち、「J」が付いた「JCT.」になる可能性が高い。なぜならば「JUNCTION」の正しい略し方が「JCT.」であるからである。最初はこの「分岐」という表記も単言語の表記(J)から多言語の表記(J・E)に移行していたと思う。しかし、こ

の写真3を見ると多言語(J・E)だった表記が単一言語に回帰しているように見えるが、あいにく日本語ではなく英語である。これは多言語化に逆行するように見えるが、実際には多言語化を乗り越えて英語化になりつつあるケースだと思う。次は高速道路への進入を意味する標識である。



〈写真4〉「高速道路」の例

この写真4からも言語表記の多様性と多言語化の現象が見られる。例えば、「東北道」の案内表記に英語が併記されている。これは多言語化を意味する。さらに、高速道路を表す「ピクトグラム」も登場した。前述したように道路標識は可読性がとても重要なポイントである。したがって、道路標識にまで可読性のよいピクトグラムが拡大したことは注目すべき点である。また、東北道の英語表記のパターンは「TOHOKU EXPWY」と「Tohoku」の2つのパターンが存在するが、ピクトグラムの登場とともに「高速道路」を表す「EXPRESS WAY」から母音を取って略語を作った「EXPWY」が高速道路の表記からは徐々に消えていくだろう。次はサービス・エリア(SA)の案内表記について説明する。



〈写真5〉「サービス・エリア(SA)」の例

特にこのサービス・エリア(SA)の表記ではピクトグラムに注目したい。英語略語や漢語に比べてピクトグラムの視覚的な効果は非常に大きい。一般的に道路標識の多言語表記のパターンは日本語・英語・ピクトグラム(J・E・P)である。しかし、この写真5の案内標識は特殊である。日本語・英語・ピクトグラム(J・E・P)に加えて韓国語(K)が入っている。海老名サービスエリア(SA)は東名高速道路に位置し、多くの人が入り出る。特に箱根という観光地に隣接し、韓国人の観光客が多く訪れる場所である。このように観光客の需要に応じて多言語表記が登場する。このような多言語表記のパターンは有名な観光地や観光客の需要が多いところで起きる現象で、可読性を優先する道路標識に登場しにくいパターンで非常に珍しいケースである。次は行政区域を表す道路標識である。



〈写真6〉「-都」「-県」「-市」「-区」の例

現在、都道府県の表記も多言語化が進んでおり、各自治体のマーク(ピクトグラム)が入っている場合も多い。また、英語の文字数が多い都(Metropolitan)と県(Prefecture)の場合、略語(Met.とPref.)で書かれている。一方、市(City)と区(Ward)の場合、英語の文字数が少ないため、そのまま書かれている。可読性を考えて、空間的な余裕も考えなければならない。次は「-川」と「-橋」の表記について説明する。

これらの標識も古い段階、すなわち、初期段階に設置したものは単一言語の表記が多い。それが徐々に多言語化していくことが確認できた。ただし、ここで注目したいところは単語の意味重複の部分である。例えば、「荒川」の場合、「Arakawa Riv.」のように日本語で「kawa」の部分と英語で「Riv.」の部分が重複している。これは「相模川」の表記と対照的である。「Sagami River」のように「かわ」の意味の重複は見られない。

「-橋」も同一傾向が見られる。「桜橋」の場合、意味の重複(Sakurabashi Br.)が見られるが、「新葛飾橋」の場合、「橋」の意味重複(Shinkatsushika Bridge)は見られなかった。



〈写真7〉「-川」「-橋」の例

次は高速道路で緊急時に使う「非常口」と「非常電話」の表記について説明する。

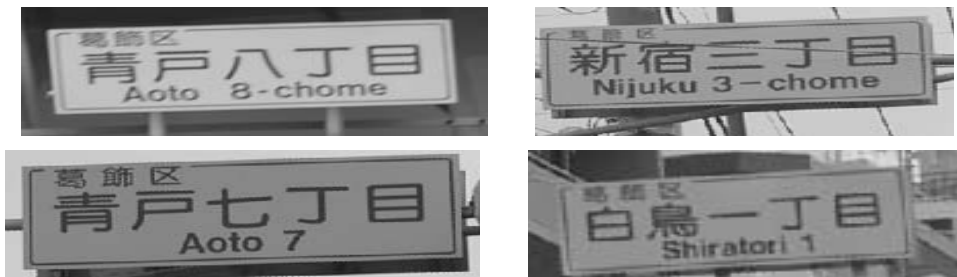


〈写真8〉「非常口」「非常電話」の例

大まかな傾向として単一言語から多言語化に移行していると言えるがピクトグラムの登場に注目したい。「非常口」は緊急時に使うものでピクトグラムがよく登場する。特に国際規格<sup>2)</sup>に合わせた非常口のピクトグラムは同一のものが多い。しかし、「非常電話」のピクトグラムの場合は国際規格に登録される前のものとが混在していて、形が異なっている。

## 4.2 一般道路での言語景観

本節では一般道路を走りながら見かけた標識に注目して説明する。



〈写真9〉「-丁目」「-町」の例

まず、道路の交差点で登場する「-丁目」について説明する。この表記は多様性が多く見られるものである。「青戸八丁目」の英語表記は「Aoto 8-chome」である。もう一つは、「青戸七丁目」の場合、町目の英語部分(chome)が省略された形である「Aoto 7」となっている。さらに、番地の数字と「-丁目」をつなげる際に「ハイフン(-)」が入っていたり、「マイナス(-)」が入っていたり標識によって異なる。このように道路標識の新旧から判断してみると日本の道路は新しいものと古いものが共存している

2) ISO7001は国際規定で公共情報の記号に準ずるものである。(INTERNATIONAL STANDARD-Public information symbols)

が、結局、地域名と番地の数字だけが残る可能性が高いと思う。



〈写真10〉「-通り」の例

次は「-通り」に関する説明である。「-通り」の表記も多言語化と表記の多様性の側面から考えられる。現在「-通り」のみ書かれているケースは非常に少ない。一方、多言語化が進んで「-通り」は英語で「Komazawa-dori」「Komazawa dori Ave.」「Bokutei dori」「Tokiwadōri Ave.」のように様々な表記がある。ここで興味深い点は「dori」に「ハイフン」や「長音記号」そして「英語の意味」がついたものがある。これまでの道路標識と違って表記のバリエーションが非常に多い。しかし、その標識を利用する側から見ると「dori」の表記に英語の意味(Ave.)がついたパターンが一番分かりやすいと思う。次は表記法の問題がある標識の分析である。



〈写真11〉「-入口」「-前」「その他」の例

前述した標識(「-川」「-橋」「-通り」)にも英語の意味は入っているが、ここで説明するパターンとは異なる。例えば、「入口」の表記が「Ent.」のように英語の意味だけが書かれたものともっばら音に依存して「iriguchi」と書かれたものがある。これに類似した例として「玉川高校」を「Tamagawakoko」と表記したものや「市役所前」を「Shiyakusho mae」に表記したものがある。もし、外国人がその表記を見かけたら、これが指すものを理解できず、漢字の読み方しか伝えられない。それでは、表記としてど

ちらが望ましいかを考えると、お互いに一長一短はあると思う。漢字が読めない外国人の場合、読み方で書かれた表記はとても役に立つと思う。しかし、これを一般名詞までに拡大して、音で表記するのは過剰な対応かも知れない。この問題については今後の課題としたい。また、あるはずの意味が省略されたケースもある。例えば「新宿郵便局前」を「Nijuku Post Office」に表記した場合「前」の部分が表記されていない。偶然ながらこの例は「前」という表記をしなくても意味伝達に障害は生じない場所であるが、標識を出す側は十分気をつけなければならない。

最後に表記の統一と誤用の修正の例である。



〈写真12〉「仙台城跡」の例

かつては仙台城があった場所が現在は観光地となり、多くの外国人観光客が訪れる。しかし、「仙台城」という間違った案内の表記のせいで、誤解を招く可能性が非常に高い。写真12は「仙台城跡」の案内内である。一番最初の写真は日本語で「仙台城跡」と書かれている。意味的には通じるが、漢字の字体が古い旧字体(趾)である。現在のもとの異なる。しかし、この旧字体の漢字より大きな問題は英語表記である。ここには「Sendai CASTLE」と書かれており、この表記では仙台城が復元されているという印象を与える。このように誤解を招く可能性が高い標識は早く修正したり、書き換えたりしなければならない。

2番目の写真はこれが修正されたものである。ただし、英語表記(「Sendai Castle Site」・「Site of Sendai Castle」)がお互いに異なっており、表記の統一の面からみると完璧に直したとは思えないが、徐々に正確な英語表現に向う段階だと説明できる。

## 5. おわりに

本稿では本人が実際に集めた言語景観の写真資料をもとに道路標識の表記の傾向や多言語表記のパターンについて考察した。データをとおして明らかになったことをまとめると以下の通りである。

- ① 単一言語表記から多言語表記に変化
- ② 言語表記が正しく自然な表現に修正
- ③ 言語表記(特に英語)が正確

つまり、初期段階の単一言語表記(J)から徐々に多言語表記(J・E・P)に変わっていくことが分かった。また、道路標識の言語表記が統一(漢字)に向かっていることが分かった。なお、言語表記(英語)が正しく自然な表現が施されつつあることが分かった。そのうち、一番多く見られるパターンは「日本語・英語」の対応である。また、多くの観光客が訪れる施設や道路には韓国語などが付けられているケース(写真5)もある。これは国際化に伴う自然な現象であるが、日本人にとっては装飾的な効果、または何の意味もない、日本人意識しない無意味なものに過ぎないと言えるだろう。

一般的に言語景観に登場する多言語表記は田中(2009)が指摘している多言語の標準モデル(日・英・中・韓・ピクトグラム)に当てはまるが、本稿で紹介した道路標識に限定して説明すると多言語の標準モデルの適用は難しい。したがって、多言語表記の政策は場面や相手によって修正する必要があると思う。紙面の関係上、網羅して分析することはできなかったが、今後、韓国の調査結果などを含めて比較し、日本と韓国の多言語表記の異動について分析を進めていきたい。

## 【参考文献】

- 井上史雄(2001)『日本語は生き残れるか』PHP研究所 pp.157-177
- \_\_\_\_\_ (2007)「多言語表示の経済原理」『社会言語科学会 第20回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.255-256
- 金美善(2007)「新宿の多言語景観コリアンニューカマーの経済活動を中心に」『社会言語科学会第19回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.257-258
- 庄司博史(2007)「多言語景観からみえるもの」『社会言語科学会 第20回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.253-254
- 田中ゆかり(2007)「「わかりやすい情報伝達」とは何か-多言語化と福祉の観点から-」『第1回博報「ことばと文化・教育」研究助成成果論文集』財団法人 博報児童教育振興会 pp.7-35
- \_\_\_\_\_ (2009)「首都圏の多言語表示-標準化の観点から-」『多言語社会・ニッポン』日本語学Vol.28-6 pp.10-23
- バックハウス,P(2007)「公共文字と日本の多言語化-東京の言語景観を事例に」国立国語研究所(編)『文字と社会』(新「ことば」シリーズ20)東京:ぎょうせい pp.92-101
- 梁敏鎬(2010)「日本と韓国の言語景観に関する事例研究-公共施設のトイレとゴミ箱の表記について-」『日本語文学』第44輯 pp.47-65
- \_\_\_\_\_ (2012)「日本語と韓国語の外来語の受容意識-イメージ分析を中心に-」『外来語研究の新展開』おうふう pp.148-167
- 양만호(2009)「한국어와 일본어의 외래어 표현-‘복사’와 ‘コピー’ ‘테이크 아웃’과 ‘持ち帰り’」『언어표현을 통해서 본 한일문화』제이앤씨 pp.61-71
- Landry, R.& Bourhis, R.Y 1997 Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology*, 16 pp.23-49

## 〈 요 지 〉

## 일본의 도로표식 패턴으로 본 언어경관연구

본 연구는 실제로 필자가 수집한 언어경관 사진자료를 통하여 도로표식의 표기의 경향과 다언어 표기 패턴에 대하여 고찰하였다. 그 결과, 초기단계에 단일 언어 표기였던 것이 서서히 다언어 표기로 변화하고 있는 점과 언어 표기가 통일되어 가고 있는 점, 언어 표기가 바르고 자연스러운 표기로 수정되어 바뀌어 가고 있다는 사실을 확인할 수 있었다.

또 '눈에 보이는 도로표식'에는 다언어 표기가 시행되어가고 있음을 알 수 있었다. 그 중에서 가장 많이 보이는 패턴으로는 '일본어와 영어'의 대응이 가장 많았다. 또 많은 관광객들이 방문하는 시설이나 도로에는 한국어 등이 첨가되어 있는 경우도 있었다. 이는 국제화와 함께 진행되어 온 자연스러운 현상이지만 일본인에게는 장식적인 효과에 지나지 않을 것이라고 생각된다. 일반적으로 언어경관에 등장하는 다언어 표기는 다나가(2009)가 지적하고 있는 다언어 표준 모델(일본어, 영어, 중국어, 한국어, 픽토그램)에 대부분 부합하지만 본 논문에서 소개하고 있는 도로표식에 한정해서 보면 다언어 표준 모델의 적용은 어렵다. 따라서 다언어 정책은 장면이나 상대방에 의해 수정할 필요가 있다고 생각한다. 향후 한국의 조사결과를 비교해 한국과 일본의 다언어 표기의 차이점에 대해서도 분석을 하고 싶다.

논문분야 : 사회언어학

키 워 드 : 도로표식, 언어경관, 다언어 표기, 실태연구

■ 양민호 (梁敏鎬)

전주대학교 인문과학종합연구소 연구교수  
minhoyang@hanmail.net

- 投稿日 : 2012년 9월 20일
- 審査開始 : 2012년 10월 19일
- 審査完了 : 2012년 11월 19일
- 掲載確定 : 2012년 11월 21일